TOPICS

神戸大学外科学講座の歩み

神戸大学大学院医学研究科外科学講座
食道胃腸外科学分野 教授
掛地 吉弘

神戸大学外科学講座食道胃腸外科学分野に赴任して6年が経とうとしています。神戸大学の外科を創り、発展させてきた先輩方のことをさまざまな機会に学んできました。

神戸大学医学部の前身は、明治2（1869）年に日本で3番目の病院として設立された神戸病院に始まります。この神戸病院は、28歳の若さで初代兵庫県知事に就任した伊藤博文が、明治元年4月の神戸開港に伴い「病院を設置して普く人民の疾病を救治しよう」との計画で、多くの寄付、献納を募って設立されました。

兵庫県立神戸病院外科に京都府立医科大学助教授の藤田登先生が昭和6年に着任し、確固たる診療業績をあげて、昭和19年1月、兵庫県立医学専門学校が設立されたのに伴い、藤田先生が昭和20年3月、附属医院第一外科部長兼整形外科部長に就任しました。昭和21年4月、兵庫県立医科大学が設置され、昭和22年8月、藤田先生は兵庫県立医科大学第一外科教授に就任しました。昭和27年2月、大学が新制兵庫県立神戸医科大学に改編されました。昭和39（1964）年には国に移管され、神戸大学医学部となり外科学第一講座となり現在にいたる礎が築かれました。

藤田教授は臨床の大家であり、難解な理屈より、外科総論を年1回読み返すことを勧めました。この頃の第一外科のモットーは「奉仕、信愛、努力」でした。〈奉仕：医を通じて社会奉仕を〉〈信愛：若い教室員は先輩を信頼せよ、先輩は後輩を愛せよ〉〈努力：家庭でも、医療でも、研究でも各々が努力を〉。藤田先生は趣味の釣りにまつわる話も含めて「浮木（憂き）を見つめて45年」という随筆集も上梓しています。その本の中で、腹部の触診、特に圧痛点について急性腹症の鑑別診断概論が丁寧に述べられています。また、「如何にして正しい完全な良い診療を行うか」について、平常反芻を繰り返してみる必要がある、とも書かれています。いかに多忙であろうとも、患者に全力を傾け注意深く観察し、よく判断し、その病気について医師の経験が後々までも役に立つ一頁にするよう心得るなど、患者を正直に上手にこなす医師すなわち名医にならねばならない、と。窪田秀雄助教授をはじめ、錚々たる講師陣が教室の屋台骨を支えました。故藤田登初代教授と故窪田秀雄初代助教授の遺徳を偲んで、現在も教室では優秀な研究成果を挙げた若手医局員に、毎年同窓会の開催時に藤田賞ならびに窪田賞を授与して顕彰しています。

◆◆◆

第二代には光野孝雄教授が昭和40年7月に就任し、さらに臨床と研究に情熱を傾けました。当時、診療範囲は主に消化器外科と脳神経外科をカバーしていましたが、昭和46年9月に脳神経外科の分離独立に伴い、教室から白方誠弥講師ら脳神経外科医が脳神経外科教室に参加しました。教育、診療に加えて研究にも力点が置か

藤田　登 先生
1947–1964

光野 孝雄 先生
1965–1978

れ、消化器、内分泌疾患の外科的新治療の開発が目指されました。代謝、栄養、外科侵襲学が推進され、高カロリー輸液の導入など周術期管理が一新されました。また人工血液の開発にも精力的な取り組みが行われ、その成果は臓器移植研究に引き継がれています。光野先生は変化し続ける社会の情勢を見守りながら、お互いに各人責任をもって行動することを指導されました。「診療、教育、研究の任を有する大学人として、さらには人として、社会人として、医師として、家庭人として、友人としての責任、などなど数えきれない責任を有している。生まれつき頭が良い、手先が器用ということだけでは、外科医としての価値は決まらない。それにプラスする努力が人の価値を決める。責任という言葉の中に努力も含まれている。各人一人ひとりの責任感と努力が社会進歩の源泉になるであろう。」スポーツも得意だった光野先生は、中学・高校での水泳や水球、医局対抗でのテニス、野球、ラグビー、サッカー、卓球、バレーボール、51歳から始められたゴルフとさまざまに楽しまれ、外科の領域でもチームプレーを大切にされていました。敬虔なクリスチャンで、王義之風の書体で「仁愛」「至誠」「奉仕」などの言葉も残されています。学問的には大変厳しい姿勢で教室員に接しられ、公私混同のない性格で曲がったことの嫌いな面があったようですが、人間味あふれるお人柄に教室員は親しみも憶えていたようです。外科医としての心得について、若い外科医は「手術に対して積極的であれ」「手術前はいくらやり慣れた手術でも手術書に目を通すこと」「手術の前後には重要な約束はするべからず」などの教えが刻まれています。会長を務められた手術手技研究会では、いつも手術手技について十分なディスカッションをすることを求めておられました。

◆◆◆

第三代斎藤洋一教授は昭和54年９月に着任しました。臨床では消化器疾患が主な対象となり、引き続き乳腺などの内分泌疾患を含む一般外科診療も行われました。消化器疾患の診療では肝胆膵疾患の外科的治療に重点が置かれ、重症急性膵炎、膵癌、肝癌に対しては、先進的治療技術の開発・導入がなされました。教育は体系化され教室員全員がたずさわるきめ細かな学生教育が行われました。また研究グループは臓器疾患別に改編され、基礎医学領域との連携で研究レベルの向上がはかられました。初代藤田教授の創生期、二代光野教授の充実期を経て三代斎藤教授の発展期を迎えました。斎藤教授は「人造り」が最も大切と考え、心技共に兼ね備えた外科医の育成を志して努力されました。在任された17年間に251名の新入医局員を得て、研修関連施設も44施設と充実し、さらには195名の学位取得者を輩出しています。斎藤先生は内蒙古の旧満州国北端の分水嶺である興安領の麓、札蘭屯で幼少期を過ごされたそうで、大陸の大人の風格が感じられます。教授就任10周年の節目の年（1989年）に孔子の言葉を引用しています。「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし。」孔子には意・必・固・我の四つの欠点がなかったといいます。すなわち、意とは主観だけで判断すること。必とは自分の考えを無理に押し通すこと。固とは一つの判断に

斎藤 洋一 先生
1979–1997

黒田 嘉和 先生
1998–2009

固執すること。我とは自分の都合しか考えぬことです。この四つの欠点がどの場合にも共通することは、自分でなかなか気がつかない、したがって是正し難いし、また陥りやすいというところにあります。孔子の別の言葉として「学べば固ならず（中略）過ちてはすなわち改むるに憚るなかれ」があります。少なくとも孔子の「四絶」のうち、多くの知識を積極的に取り入れて行くことが、人間を「固」の弱点から解放する最善の道であると教えています。また、さらに判断、行為が過っていたならば、直ちに改めることに躊躇してはならないことも教えています。

斎藤先生は、神戸大学医学部創立50周年の年（1994年）の同門会誌に、次の文章を寄せています。「中国語の諺に「良馬は後ろの草をくわず」という諺があるが、動物とは異なり人間の世界にあっては、陸沈であっても、盲瞽であってならず、すなわち、温故知新を旨として先人の努力の跡を推敲して、またその精神を継承して新しい展開をはかることが道を誤らない最善の行き方と思う。この節目の時を迎えた本年はScience, Art それに Heart を備えた外科医造りをモットーに原点を見直して将来のさらなる発展を目指す年にしたいと考えている。」

◆◆◆

第四代黒田嘉和教授は、患者本位の医療の実現を目標に外科診療を実践されました。消化管、胆膵、肝、内分泌の４グループで入院、手術、外科管理、研究まで一貫した診療を行う体制となりました。患者に還元できる独創的な研究を遂行し、研究成果の質の向上をはかる上で、分子生物学、移植免疫学、感染と生体反応、化学療法など臓器別研究にとらわれない有機的な連携を模索されました。膵、膵島、肝の移植治療については蓄積された研究成果を踏まえ臨床応用を開始し、特に膵移植においては、世界標準となる臓器保存法（二層法）を確立してきました。「夢をいだき、実現に向かって情熱を傾ける」言葉通りの実践を身をもって熱く示してくださいました。

神戸大学病院診療科再編成、外科の大講座制移行に伴い、旧外科学第一講座と第二講座が合同し、2007年から大講座として新たなスタートを切りました。2008年までに臓器機能別に食道胃腸外科（黒田嘉和教授）、肝胆膵外科（具英成教授）、乳腺・内分泌外科（がんセンターから高尾信太郎教授）、心臓血管外科（大北裕教授）、呼吸器外科（がんセンターから吉村雅裕教授）、小児外科（こども病院から西島栄治教授）の６分野に再編されました。食道胃腸外科は診療内容を消化管に特化して鏡視下手術、集学的治療など診療面の充実がはかられました。

2018年現在、各分野の長が毎月一回、外科学講座運営会議として集まり情報交換を行い機能的な運営をはかっています。診療や研究について互いに意思疎通や情報共有ができ、審議や議論が必要な際もすぐに連絡を取り合っています。若手の勧誘や教育については、外科学講座としてまとまった動きができて、外科手技のハンズオンセミナー等を通じて交歓の場が設けられています。外科医が活き活きと働けるように職場環境や処遇改善に努力し、若く有能な外科医が数多く育成されることを願っています。